



プリントアウトした請求票は、所蔵部署階のカウンターにお持ちください

2011年01月06日 11:47:58

2011年01月06日 11:47:58

入館証番号:

入館証番号:

Call Slip

<請求票>

| |
|------|
| 3192 |
| T342 |
| T |

Call Slip

<請求票>(控)

資料名: 中国の眼

巻次 :

著者名: 玉嶋信義 // 編訳

出版者: 弘文堂 頁数 : 285p

大きさ: 19cm 出版年: 1959

| 書名 |
|-----------------|
| 資料名: 中国の眼 |
| 巻次 : |
| 著者名: 玉嶋信義 // 編訳 |
| 出版者: 弘文堂 |
| 出版年: 1959 |
| 大きさ: 19cm |
| 頁数 : 285p |

所蔵館 : 中央

所蔵部署 : 1階資料お渡し・返却カウンタ

所蔵館 : 中央

所蔵部署 : 1階資料お渡し・返却カウンター

配置場所 : 1/76A 中)B2書庫A

資料ID : 1126042064

配置場所 : 1/76A 中)B2書庫A

資料ID : 1126042064

| 請求記号 |
|------|
| 3192 |
| T342 |
| T |

| | | |
|--------------------------|----|----|
| 一社人自東新 | 力 | 事 |
| ↓ | | |
| 一社人自東新 | 請求 | 報告 |
| MB1 マイコ B1 アルファベット 原紙 縮刷 | | |
| MB2 マイコ B2 洋 中 朝 | | |
| 行 1F B1 B2 | | |
| 多 児 青 1F B1 B2 | | |

切り取り

②次、1~5
頁 262~282

目次

I 惜別の辞

| | | | |
|---|---------------------|-----|----|
| 1 | 藤野先生 | 魯迅 | 三 |
| 2 | 抗議の遺書 | 陳天華 | 二 |
| | 「放縱學劣」—小生の革命觀—親日と排日 | | |
| | —學拳を戒む | | |
| 3 | 屈辱をけつて | 汪拱璧 | 三〇 |
| | 救國運動の計画—サーベルと文明— | | |
| | 問答 | | |
| 4 | 私のアジア主義 | 孫文 | 三 |
| | アジアの復興—王道と霸道—日本の進路 | | |
| 5 | 最後の期待をこめて | 孫文 | 四 |
| | 中国革命は明治維新の第二步—中国の統一 | | |
| | と不平等條約 | | |

孫天華の「絶命書」

明治四十一年就獄で発行された『孫文の中國革命同盟会の機關誌「民権」』に掲載された。(本文十一頁参照)

II 抗日の哲学

- | | | | |
|---|---|--------------------|----|
| 1 | 興亡の岐路にたつて | 中共ソソフエト政府 中央委員会 | 毛 |
| 2 | 抗日の戦略と戦術 日本は必ず負ける—勝利の鍵 | 毛 沢 東 | 六 |
| 3 | 日本の国民に告ぐ 中日両国は不可分の関係にある—暴によつて徳に報いる日本軍國—狂暴な日本軍—日本民衆を激視しない | 蔣 介 石 | 七 |
| 4 | 日本人のアジア論 白色人種と黄色人種—日本製大アジア主義の発展—日本の侵略主義—日本の意図するもの—国民衆の進路 | 江 公 懐 | 八 |
| 5 | 停滞史観の本質 「停滞性」論者の本質—家父長的専制主義—中央集権の土台—中国社会の発展を遅らせたもの | 呂 振 羽 | 二〇 |

III 敢えて直言する

- | | | | |
|---|---|---|-----------------------|
| 1 | 暴に報いるに暴をもってするなかれ | 蔣 介 石 | 三 |
| 2 | 真の平和を求めて | 朱 德 | 三 |
| 3 | 寸言 (日本および日本人) 「軍閥」という言葉 蒼白きインテリの死 人間教育 日本人の「忠」 日本に期待するもの 落第した秀才 | 石 決 明 曹 成 修 葉 聖 陶 楊 蔭 深 夏 衍 | 三 四 四 四 四 |
| 4 | 富士の美を汚すなかれ | 陶 昌 孫 大 公 報 | 五 五 |

IV 「過去を忘れよう」

- | | | | |
|---|-----------------------------------|-------|---|
| 1 | あらゆる分野の交流を 日本の独立—日中關係の過去と現在—民間 | 周 恩 来 | 六 |
|---|-----------------------------------|-------|---|

| | | |
|---|-------------------------------------|----------------------------|
| 2 | の交流を 帰去来兮 <small>かえりなにいき</small> | 郭沫若 <small>くわくもくわく</small> |
|---|-------------------------------------|----------------------------|

二十年の交流―私がはじめて日本に来た時
―近代の日中関係―中国の近代化―歴史の
教訓―新中国の発展―政治と人民―私の提
案

| | | |
|---|------|---------------------------|
| 3 | 日本拜見 | 王芸生 <small>わうげんせい</small> |
|---|------|---------------------------|

気になること―戦犯の涙―不愉快な歴史は
忘れよう―古典演劇―新聞記者の手品―頹
廢

V 「叩け、さらば開かれん」

| | | |
|---|-------------|---------------------------|
| 1 | われわれは抗議する | 南漢宸 <small>なんかんちん</small> |
| 2 | 三十六計和するにしがず | 周恩來 <small>うゑんらい</small> |

中国の統一―二つの中国―アメリカの火遊
び―「三十六計逃げるにしがず」―西国人
民共通の闘い―アジアの団結
(資料) 蔣介石も中国人だ

| | | |
|--|--|---------------------------|
| | | 翁文灝 <small>うんぶんせう</small> |
|--|--|---------------------------|

| | | |
|---|----------|--------------------------|
| 3 | 義理を重んじよう | 周恩來 <small>うゑんらい</small> |
|---|----------|--------------------------|

われわれの原則―岸首相は大和魂も失って
いる―鍵は日本側にある

(資料) 「大真革共英園」の悪夢

| | | |
|---|---------|------------------------------|
| 4 | 中国は急がない | 人民日報 <small>じんみんにっぽう</small> |
| | | 毛沢東 <small>もうさくとう</small> |

| | | |
|--|-------------|------------------------------|
| | 中国人の日本観(解説) | 玉嶋信義 <small>たましまのぶよし</small> |
| | あとがき | |

もはや、日本は対等に中国と話しあう言葉を失ってしまったように見える。

それはたんに、中国の対日感情が非常に厳しいという意味ではない。たしかに、中国は日本の「敵視政策」をつよく非難し、大東亜共栄圏の再現であると批判している。しかし、もっとわれわれ日本人全体にとって痛烈な状態は、その批判がすで外交辞令の域を脱して、人格的批判にまでなっていることではないか。「岸信介はアジアでいちばん腐っていない。男じやない。かれは大和魂もないではないか。これは周恩来の表現である。

これをひとつの冗談か皮肉として、他人ごとのように受けとるものがあるとしたら、それは大変なことではないかと思う。このばあいの岸信介とは、固有名詞であると同時に、抽象名詞でもある。「敵視政策」という表現と論法をそっくりまねて、力にならない口先だけの批判をおこなうような状態は、空に向かって唾をはくのと似ているのではないか。口先だけで友好をとなえながら、今になっても、中小企業窮乏の尻ぬぐいをさせたり、一つの党派や個人が利用するために民間の交流をやるうとするような傾向は、岸信介そのものではなかったのか。交流のつみ重ねを失敗に終らせたのは、われわれ日本人全体の恥であり、遺憾であったというい方は、政府

の対華政策への批判と矛盾するものではない。だとしたら、過去の自己を刳抉することなしに、中国の批判を模倣したり、これに便乗するだけでこと足れりとするのは、恥の上塗りというものであろう。

民間の交流がまた華やかだった頃、来日された多くの中国人は、不愉快な過去を忘れよう、いろいろな機会にのべた。そして、多くのばあい、それは拍手で迎えられた。過去を忘れるということが中国の人びとにとっては何を意味するのか、日本人にとってはいかなる問題とかわかりあうのか、ほとんどの場合、日本人の微笑と歓声と握手のうちに問題にもされなかった。しかし、今日の不愉快きわまる状態の深い根は、この「過去」を「忘れる」ことにつながっているのである。われわれは、王荃生氏が一九五六年の夏、来日された時の発言を、その意味で思いおこしてみる必要があるだろう。氏は、戦時中に書かれ、日本でも翻訳された『六十年来の中国と日本』について質問をうけ、こう述懐している。

「この本は、いわゆる『瀋州事変』の後、日本の侵略に直面して、それに抵抗するために、まず歴史的な痕跡を究明して人びとに知らせるといふ文筆家の役目を果たすために執筆したものです。ですから、この本には、中国と日本との間の最も不愉快な時期がとりあつかわれています。しかし、今日はすでに時代が変わりました。だから私は、この本を絶版にしています。中国と日本とは二十年の友好関係にあり、不愉快な時期はごく短い間にすぎません。今はこの不愉快な時期を忘れるべき時だから、自分の著書は不適当なのです。

……中国における日本人戦犯の行爲について、中国側は事実にもとづいた詳しい調査書ができていますが、しかしそれを発表する気持は全くありません。またたとえ、今まで多くの日本人が招かれて中国にきましたが、その中には中国人の生ききをも食べた人間がいることも自分は知っています。そういう人たちも、中国の習慣に

ふれて帰れば、きっと平和の尊さを確信するにちがいない、中国人はそういう人たちと涙がでるのをこらえて握手しているわけです。日本人戦犯の場合でも、もし不愉快な事実を發表したならば、日本へ帰国することはできなかったでしょう。發表しないために帰ることができたのです。ところで、自分たちが大阪へいった時、その戦犯たちの来訪をうけ、一同が涙を流して感謝し、われわれも共に泣きました。この戦犯たちをもし処刑したとしたり、それで終りでした。しかし、無事日本へ帰ったことによつて、この人たちは生れかわった人として活躍しています。これはいわゆる洗脳ではない。中国人の血と涙とがその良心をよびさましたのです。そして、この人たちが津々浦々に平和を語りついでいくことによつて、血と涙とは償われるのです」

かれが真心から吐露したこの言葉を、われわれが虚心に聞けば、民間の交流をつうじて平和と友好の関係をよめるために、いかに大きな忍耐と努力がなされたかをほつきり知ることができる。過去を忘れるということは、指導的な人びとにとつても、大きな苦痛だったが、素朴な中国の民衆にとつては、われわれの想像以上のものであつたにちがいない。

一九五二年の單獨講和が結ばれるころ、中国の対日輿論は、日本が中国を除外しようとすることに激しい抗議をくり返した。中国は全面講和による日本の独立を要求した。しかもそれはたんなる外交上の文書に示されただけではなかつた。この時、日本の新聞はほとんど緊殺したが、中国のあの広い大陸が嵐のように湧きたつたことを見落してはならない。中国の民衆はほぼ一カ月も忙しい建設の手を休めて、津々浦々に老若男女の小集會をひらいた。殺された親兄弟のこと、日本兵の暴行のこと、生々しく残っている傷痕を見せあいながら、一人一人「坦白」へうちあけをやつて、涙ながらに日本との全面講和を要求し、再軍備に反対する決意を深めたのであ

る。傷はまだ癒えていないのである。その後、数年間中国政府は日本人民と日本帝國主義はべつであり、日本人民は友好を願う友人だから、これとは仲良くしなければならぬといういい方で民衆を教育してきた。日本人が招かれて各地を參觀するにあつても、中央から政府の工作員を派遣して、現地の民衆と討論を重ね、平和を愛する日本の友人を歓迎するという考え方が民衆の自発的意志に高まるまで、説得と指導をくり返したといわれる。また、中国の国旗が長崎で何者かによつて引き下された時、民衆はたまたま見本市の会場にあがつていた日本の国旗を引きおろすように要求したが、中国政府はこれを説得しておさえたという事実もまた記憶に新しい。

かれらは、日本の近代的技術と製品を、その生活と生産の向上のために、非常に強く欲している。日本の映画週刊が北京でおこなわれて絶讃を博し、日本の見本市が盛況だつたことは、日本との経済と文化の大々的な交流を希望していることの一つの表われにすぎない。この希望を裏切つたのが、中国政府か日本政府かは明かである。また、同時に、これを裏切つたのが、政府だけでなかつたことも明かだ。中国に招かれて訪問したある日本代表団の一人が、あるホテルの服務員へボーイをつかまえて、「姑娘」のいるところへ案内しないかと頼んだことから大問題になり、かれら服務員は大会をひらいて、過去の侵略者のような態度の「反省」を求めたことや、上海の街頭で同様のいかがわしい行動をとつた日本人が、群衆に囲まれ、激しく追求され、警察官の保護をやつと釈放されたというような事實は何を物語っているのか。

過去を忘れるための中国の努力は、まさに自己の体を引き裂くような苦痛を伴つていたのだ。主としてかれらの努力に負つた交流のつみ重ねを、今日一片の死文と化せしめたのは、われわれ自身がかれらの苦痛を感じとろうとしないか、または感じとることのできない何ものがわれわれの体内に潜んでいるからではなかつたか。近

代百年にわたる、中国人の日本観の変遷の中には、われわれ自身の姿の投影をさまざまと見ることができるのである。

266

二

毛沢東、周恩來、鄧稼若など中国の今日の指導者をはじめ、孫文、ガンディー、タゴール、ネルーなど多くのアジア人は、明治維新をひじょうに高く評価している。「大アジア主義」という題でおこなった講演では、孫文は、明治維新から日露戦争にいたる日本の独立と富強を当時の白人に辱けられたアジア人が歓呼で迎え、わがことのように尊んだありさまを生き生きと語っている。セボイの反乱が弾圧され、太平天国の革命が敗北におわつたあと、十九世紀におけるヨーロッパのアジア支配にたいする反撃は、明治維新によつてはじめて成功したのである。日本はアジアの民族主義に火をつけ、アジアの希望を象徴する存在になっていた。孫文のいうように、「明治維新は中国革命の第一歩であり、中国の革命は日本の維新の第二歩である」という受けとり方は、多くの中国人に共通している。もちろん今日の中国の指導者は、明治維新を高く評価すると同時に、その後の日本が民族独立の精神を忘れ、アジアの植民主義を学んで中国を侵略したことを、同時に指摘している。ノーマンのようなすぐれた日本史家や日本人の研究者のように、いわゆる絶対主義批判の視角ですべてを分析し、維新のアジア史的側面を無視するという方法を、西欧的発想だとするならば、これはアジア的発想といふことができるだろう。アジアの生産様式論争以後の日本のマルクス主義が、「大アジア主義」や「真正共同体」へ発展したのは、後に見るように、このアジア的発想のヴェールをかぶつた西欧的発想の戯画化にはかならなかつた。

維新以後、富強の道をすすみはじめた日本が、中国人の学び対象とされたのは、日清戦争とくに日露戦争後のことで、明治初年の中国の知識人はむしろ日本を反感と敵意をもって眺めていた。初代駐日公使として明治十年に赴任した何如璋は、日本が「近頃、西欧の習俗に趨き、上は官府から下は学校までおよそ制度、器物、言語、文字、儼然として泰西式としている」状態を憂えているし、後に『日本国志』を書いて有名になった龔自珍も『日本維新誌』のなかで、漢学が幕末の尊王運動に大きな役割をはたしたのに、「何ぞ国を負いてこれを廢せんや」と不満をのべている。かれらはみな、日本人が漢学をとりいれて漢学を輕視し、本體層をとりいれて洋服を着る様子を見て、一樣に日本が中国文化圏から離脱するものと考え、強い反感をいだいていた。唐、宋時代には親しい往来がひんぱんにおこなわれていたけれども、元の時代から元寇や秀吉の朝鮮征伐らい、中国人は日本を侵略的民族とみなし、東夷の一小國にすぎないと侮っていたのである。そのうえ、東夷の一小國が中国文化圏からはなれるばかりか、台湾や朝鮮に事をかまえて対立しようとする強壓を見て、このような侮日論はしたいに「攻日論」にかわつてきた。

陳其之が明治初年に著した『日本近事記』では「それ日本人、夢を望むこと久し、大兵をもつて臨めば何ぞ瓦解せざることあらんや」と日本征討を主張し、明治二十年に来日した傅雲龍などは政府の命をうけて攻日のための地誌調査をやり、清末の改革派である張之洞も明治十三年には日本を攻めとるよう上奏している。荒尾精らの大陸浪人が参謀本部の密命をおびて中国に渡つたのも、明治十九年のことだつた。

かれらの日本観は、伝統的な中華意識に根ざしていたから、日清戦争の敗北はそれを根底からくつがえすほどの衝撃だつた。改革派の変法運動は、中華意識を真向から否定されて、世界と日本にたいする認識不足を改めた

267

ことから生れたものである。かねて、日本の国力の発展に注目し、『日本書目志』を編さんしていた康有為は、『明治変政考』を書き、明治維新にならつて国家自強の道を講ずべきだと論じ、日本の書物の翻訳と留学生の派遣が必要であると説いた。攻日論を唱えた張之洞も学制改革を怠るために、日本へ留学生を派遣すべきだと上奏した。明治二十九年の官費留学生からはじまる官費私費の留学生は、こうして年々増加の一途をたどり、義和團事件で日本軍の武勇と軍規の厳正さが喧伝されたのちはさらに急速となり、日露戦争で老大国のロシアを敵つてからはその数は数万になつたといわれるほどであった。

かれらが学ぼうとしたのは、最初日本自体の文化ではなく、むしろ日本に輸入された西欧の文化であった。日本から西欧の文化をいれた方が、手間が省けて効果が速いという便宜的手段として考えていたのである。だから戊戌政変に敗れて日本に亡命したかれらは、敗北の原因に思いをはせて、もう一度考え方が変化する。かれらは、日本へきてはじめて明治維新の成功の原因をつかむことができた。それは雄厚な下級武士の存在であり、武士道の精神の力であつた。梁啓超は明治三十二年に「中国魂いずこに在りや」という文章を書いて、武士道を賞讃し「戦死を祈る」の中で日本人の高武の精神が日本を今日あらしめたのだと説き、その後明治三十七年には『中国の武士道』という本を書くほど、魅了されてしまった。上層官僚を中心とする改革派にとって、日本の下級武士とその精神は一つの理想像だったのである。康有為たちが近衛篤磨と会見したとき、皇帝復位の切なる願いをへ、近衛の説く東洋モンロー主義に跪拝するような態度で賛成している。かれらは、かつての中華意識にもとづく攻日論から拜日論へ一八〇度の転換をとけてしまったわけである。

亡命者と留学生で賑わう明治の後半から大正の初期までは、近代日中国係の中で唯一の親日時代ということが

できただろう。その親日のにない手は、一時は数万をかぞえるといわれた若い留学生たちであつた。

改革派が東京で発行した『清議報』は、若い留学生の救国意識に大きな影響をあたえた。富国強兵の道をすすむという点では、共通した一面があつたからである。「武士道」という言葉を中国語に移植した梁啓超らの考え方は、一部の青年に感化をおよぼし、蔣介石のように日本の陸軍士官学校へ入学するものは、明治の末にひじょうにふえた。

若い留学生たちの救国意識は、改革派と重なりあつた富国強兵の意識の面もあつたけれども、満清皇帝を絶対王制化していこうとする改革の計画とは基本的に対立した。上層官僚よりも一段と低い郷紳層出身の若い留学生たちは、孫文、黄興を中心とする同盟会に結集し、『民報』を発行して改革派とたたかい、たたかいつらうじて、国民主義的の民族革命を標榜した。かれらの民族主義的の自覚は、改革派とことなり、近代的な自己の意見を根底においていた。千数百種にのぼるこの時期の中国の雑誌のうち九〇パーセント以上が留学生が日本で創刊したものであつたことから、かれらの自覚がいかに広汎な新文化運動にもりあがつていたかを知ることができよう。

かれらもまた、留学の目的は日本に学ぶというよりはむしろ、日本に輸入された西欧の近代思想と文化を撰取することであつた。かれらは、ミル、スペンサー、スミス、ルソーからアナキズムにいたる近代思想を学びつつ、その激しい救国の意識を論理づけていった。日本にたいするかれらの態度が、改革派のそれとは全くことなつていたのは当然である。改革派が日本の藩閥政府とそれを支える政客に随つたのに反対に、若い革命家たちのグループは、日本のラディカルな自由主義者、社会主義者のグループと結びつき、かれらと同志的な交りを探め、さらにロシア革命党の亡命者たちとも連携した。宮崎滔天らと孫文、黄興、北一輝と宋教仁、華徳秋水と

張^{チヤウ}、繼^{ツグ}、辜^コ大^{ダイ}炎^{エン}、さらに後にポーランド大統領となったピルスツキイと孫文、宮崎らとの関係、これらはまだいずれもかれらの運動が大衆的基礎をもたなかつたために、一見、思想や論理以前の任性的つながりの色が濃いのであるが、それだけに血肉の深さをもっていた。こうして明治三十八年に成立した中国革命同盟会は、その綱領の一つに、「中日西國の國民的連合」というスロガンをかけ、その機關誌『民報』と、宮崎ら自由民権大陸派の『革命評論』、長崎に亡命したロシア革命黨員たちの『ウオーリヤ』は共同戦線を形成して、日本はアジアの民族主義と民主主義革命の一大根據地の輿を呈するほどだった。しかし、近代の日本がアジアと結びつきを深めた最初にして最後のこの時期は、わずか数年で過ぎ去った。それは、桂太郎その他の藩閥権力が、清朝やロシア政府の要請をいれて、徹底的な弾圧にのりだしたからであった。清国留学生取締規則の実施と『民報』の発禁は、中国人の日本にたいする期待を裏切り、暗黒の中へ突き落してしまった。国民の覺醒を促すために死をえらんだ陳天華、暗殺と実行行動に挺身した汪兆銘、宋教仁らは、日本政府の圧迫によって触発されたラディカルな心情の暴発であった。この中で魯迅だけは、革命者としての情熱を内におし殺しながら、周囲の蔑視に耐え、新しい抵抗の地点をまきぐつていった。かれをあげました「藤野先生」のような人物は、日本人のすぐれた面を代表する稀有の存在だった。

かれらの日本にたいする親近感が強ければ強ほど、日本人の蔑視と政府の圧迫にたいする反感も強くなっていった。革命を志すことなく、法律を学ぶことが出世の近道だと考えていたような実利主義的な学生たちですら、日本人の態度にかれらの眠っている民族主義感情がよびおこされたほどである。明治の末からしたいに強まったかれらの反感は、一九二五年の二十一カ条条約いらい雪だるまのようにふくれあがつて、一九一九年の五・四運動へ発展していくのである。

三

一九一九年五月四日の学生デモからはじまった五・四運動は、従来までいわゆる日貨排斥の運動として一般の日本人にうけとられてきた。四年前の二十一カ条に憤激した日本留學生の役割も大きかったことは事実である。しかし、それがたんなる排日運動に終始せず、知識人や学生のワクをこえた広い大衆運動になっていったのは、日本について何もしらない無智蒙昧な大衆が盲目的にかりたてられたからではなかった。むしろ、意外なほど中国人の日本認識は深かった。たとえば――

一九一四年の青島戦争がおわってドイツが降伏した後、日本司令官の神尾大將がある時中国の小學校を視察する機会をえた。

学校の教師に「何でも生徒にお聞き下さい」といわれるままに、かれはごく初歩的な質問を試みた。

「皆は、日本で誰がいちばん偉いと思うか。」すると生徒たちはいつせいにこう答えた。

「ハイッ、福沢諭吉です！」

乃木大将とか東郷元帥をあげるのが日本のふつうの子供であったから、神尾と幕僚たちはこの意外な答におどろいた。これを聞いた吉野作造は、「中国の少年たちは、日本人よりもずっと日本のことを知っている」といったということである。

この青島の日本紡績工場にはたらく労働者たちがストライキをやったころ（一九二四年）、中国研究家の鈴江

言一がストの現場を調査にいった。当時の中国人労働者はいわば苦力同然に見られ、ストは少数の煽動者によっておこされるものだと考えられていた時であるが、一般の紡績労働者たちは鈴江をつかまえて、天皇と普選の関係について鋭い質問を浴びせたといわれる。

日本留学をしない学生たちも同様であった。今日の中国を指導している毛沢東は、師範学校時代、多くの学友が病気でたおれたことから、中国の教育制度の欠陥を感じ、日本の学校教育を詳しく研究した。かれの小学校時代の教師も、日本留学生あがりだったから、それまでにも日本の事情はかなり具体的に知っていたと思われる。調べた結果、日本では小学校から体育を義務づけ、徒手体操から機械体操、球戯、水泳にたいするまで系統的に採用していることを知って、課外の体育活動を呼びかけ、自分も率先実行した。かれがはじめて書いた系統的な論文は、この調査にもとづく「体育の研究」という一文であった。師範学校の学友会が宮崎滔天を招いて講演をきいたのも毛沢東の提案だったといわれている。

もちろん、このいくつかの例に見られるような日本にたいする態度が、そのまま五・四運動の日貨排斥を成立させたわけではない。第一次大戦中によりやく発展しかけた土着の産業が戦後日本の経済進出で打撃をうけ、くわえて日本の中国独占を目論む条約をおしつけられたことが排日という形をとらせた原因であった。しかし、かれらの排日運動は、このような日本にたいする謙虚なうけとめ方、あるいは連帯感、親近感を否定するのではなく、むしろ反帝・反封建という風潮の中へ、ふくみ入れ、統一していったのである。したがって、すでに当時の日本人が騒いだような単純な「排日」ではなく、新たな民族国家建設の序幕だったのだ。中国共産党は、こうした五・四反帝・反封建の大衆斗争をつうじて生き残ったものである。

日中関係のこのような変動が、孫文らの革命派にも大きな影響をあたえ、かれらの日本観にも変化をもたらしたことはいうまでもない。一九〇五年に結成された革命同盟会がかかげていた「中日兩國の国民的連合」というスローガンは、「中華革命党」（一九一四年）に発展した時にはすでにおろされ、一九一九年の国民党結成時には影も見えなかった。辛亥革命後の日本政府の対華政策は、北方派を援助し、これを親日勢力として養うという基本的方向をとっていたし、また革命を援助する日本の大陸浪人も、すでは恃むにたりぬものとなり、政府の反民主的政策にくみこまれてしまうものが多かった。こうして日本からだされた二十一カ条の要求は、かれらを完全に日本から追いやつてしまい、日本にたいする希望を断ちきってしまった。

しかし、孫文らは五・四に爆発した大衆運動のエネルギーを指導することなく、傍観していたばかりでなく、日本の支配層にもまだ一抔の幻想をいだいていた。戴季陶の『日本論』によれば、革命失敗の後、日本に亡命していた時、桂首相と延十五、六時間も会談して、日華提携の政策について意見の一致を見たといわれる。しかし、南方革命派に対する友好的な措置を一時確約することはできても、恒久的な友好策がこの中から生れることはありえない。日本の経済的發展の結果としてのいわゆる「大陸進出」が、二十一カ条はなくとも、いずれ大きな抵抗にぶつかるのは必然的だったからである。にもかかわらず、孫文は桂に希望を託し、かれの死を悲しんだ。孫文が北伐完成のために、一九二三年国民党を改組して共産党との合作にふみきり、またソヴェトを国際的な同盟軍として手を握った翌二四年、日本に立寄ったさいにも、日本にたいする淡い期待はまだ消えさつてはいなかった。

「大アジア主義」という題をあたえられておこなったかれの講演は、根本的には日本の不平等条約を撤廃せよと

いう忠告であった。文字どおり日本の対華政策にたいする批判であり、東洋王道をえらぶか、西洋覇道の犬となるかをせまったものである。後に日本のマルクス主義者の一部がこれに便乗し、東亜新秩序の論理とつなぐためにむやみに利用した扱いかたには、こっけいなほどの牽強附会があった。が、やはり孫文の中には、同盟会時代のアジア主義的連帯感がまだ残っていたようだ。王道と覇道という問題のとらえかたや、端々にでてくる「血は水よりも濃い」といった言葉から、日本国民にたいする消しがたい信頼感が顔をのぞかせていると考えられないことはない。かれの頃の中では、日本の一般國民と桂太郎、宮崎滔天、頭山滿たちが、分ちがたく同居しているようだ。このような感覚は後に拡大されて、國民黨内の知日派にひきつがれ、東亜連盟運動の中へ糸をひいていくようである。

絶望と期待、不安と希望という混沌未分の状態を、歴史はいつまでも放置しておかなかつた。新しい事態に即応する新しい論理が生じなければならなかつた。中国共産党草創期の指導者李太鉞は、一九一九年に新しいアジア主義を提唱してこういった。

「日本の大アジア主義は、列強の勢力を排除して中国を独占化しようとする意図をしめしている。同文同種とはかくれみのにすぎない。このさいアジア人は、ともに新しいアジア主義をとなえて、一部の日本人がとなえる大アジア主義にとつてかえなければならぬ。たとえば浮田和民は中日連盟を基礎として現状の維持を主張するが、われわれは民族解放を基礎として現状の根本的改造を主張する。アジアの征服されている民族はすべて解放しなければならない。そのうえで、対等な関係において相互に協力しあうアジア連邦をつくらなければならない。」

孫文にみた混沌、論理と感情のずれは、ここではマルクス主義的視覚にひきしめられ、民族解放の新しい次元

で統一されている。孫文をふくみ、孫文をこえ、今日につうずるこの発想は、今から四十年前にすでにその基礎をおいていたわけである。

四

「近ごろ、中国と日本との感情はとみに悪化し、中国人は日本語をきき、日本の文字を見れば頭痛をおこし、下駄の音をきけば吐気をもよおし、日本という言葉さえ嫌がるものもあるほどだが、それは小人のなすことで、このような時にこそ日本の侵略を大いに研究する必要がある。」

これは、一九二八年に国民党の宣伝部が出版した「日本研究叢書」の序文の一節である。山東出兵、済南暴動、張作霖の斃死という一連の不気味な足音が、中国人の神経をどんなくあいに無立たせていたか、わかるようだ。このようなふんい気の中で、日本にたいする関心は深まり、日本の分析と批判が系統的になされはじめた。戴季陶の『日本論』（一九二八年）、周仏海（当時の国民党宣伝部長）が主筆となっていた『新生命月刊』の「日本研究特集号」（一九二八年）蔣方震の『日本人とある外国人の研究』（一九三七年）をはじめ、数えきれぬほどの単行本や雑誌やパンフレットが発行された。中国全土のすべての触覚が日本に集中した感があつた。ここにあげた国民党の知日派による三つの著書はその代表的なものである。

戴季陶によれば、日本民族の優劣性は民族的信仰力をもつ武士道に象徴され、明治維新の成功は武士階級によるものであつた。日本の墮落は武士道の衰退の結果である。「武士道」の衣をまとう「武士出身の墮落官儀」と「町人出身の奸悪」が結び、卑俗で打算的な町人根性が、尚武と愛美と平和の精神にとつてかわつたことが日本

軍国主義を侵略化してしまった。だから、かれは帝国主義と軍国主義の日本にたいする反感を露骨にあらわして田中義一を罵るが、孫文と「大アジア主義」政策で手を握った桂太郎を賞讃している。孫文の中に流れていた同文同種の親日感情が、ぐっと拡大されて梁啓超らの排日論と背中あわせにくつついている恰好である。

蔣方震は、日本の悲劇は、情熱的で短気で過激な、そして厭世的で末梢的な觀察しかできない日本民族の心理的欠陥が、社会的、経済的欠陥と重なりあつてきたことである。国内の矛盾がはげしくなるにつれて、行きづまりを煩悶する青年将校たちが、大陸発展の中に解決を求め、革命と対外戦争に一すじの希望を見いだす。この悲劇の具体相を政治・経済・外交の面から分析して、悲惨な結末をもたらすにちがいない、と、かれは深い悲しみと同情をこめて説く。裏切られた親日派の誇りめきれぬつばやきが、欠陥ばかりしかないはずの日本民族論の中から隱見される。

中国共産党の創立にも日本在學時から参画しただけあつて、周仏海の日本批判は前の二著よりも論理的な装いをもっている。特異号の巻頭をかざるかれの「日本の危機と我等の努力」は、日本の経済的危機の様相を論じ、日本帝国主義は表面的には強大であるが、その病状は悪化の一途をたどりつつあるから、中国国民革命の進展は必然的に日本の危機を増大して崩壊にみちびくであろうと結論する。日本何ぞ恐るるに足らず、国民党による革命の進行あるのみ、というのがかれの論旨を一貫している。

周仏海がそれを書いたのは一九二八年だつたということは注目に値する。国民革命が日本の危機を深めた一つの大きな要因だという指摘は正しかった。上海の日本紡績工場のストにはじまる一九二五年から一九二七年にいたる大革命がウォール街の暴落に直撃ひびき、一九二八年にはじまる世界大恐慌のいどぐちだつたことは隠れも

ない歴史の事実である。と同時に、一九二七年四月の蔣介石の労働者弾圧いらい、国民党は国民革命の進展に積極的妨害者としてたれ現われていたことも事実であり、国民党が投げ捨てた孫文の国民革命の旗は、中国共産党の指導するいわゆる「赤色地域」にひきつがれていたのである。しかもこのソヴェト政権を攻撃するために、イギリス、アメリカ、ドイツの資本や武器とともに、国民党は日本の武器を輸入するほど日本帝国主義の恩恵をこらうむつていたのだ。かれらの日本批判は、周仏海のばあいですらこの歴史的事実のこまかしの上に成りたつものだつた。だから、危機の深化による日本帝国主義の急速な崩壊と敗北という指摘は、觀念の操作にすぎず、実践的な抗日論をうみだすものではなかつたのではないか。済南事変、満州事変、華北侵入、芦溝橋事変へと発展した歴史の歩みは、かれらの論理の矛盾と理解の觀念性を真向からうちくだしているにもかかわらず、これらの知日派たちは、一面妥協、一面抗戦という動揺した立場に引下り、さらに「蔣政権を相手とせず」という近衛声明にみちびかれて、親日政権をうちたてるにいたつたのである。

国民党の知日派たちの日本批判が、日本のかんたんな崩壊を予測する分析にとどまつたのに反して、共産党は、むしろ戦争の初期には、日本軍は一方的な優勢を保つて進撃するだろうと評価した。かれらは彼我の力関係の周到な計画と國際的な反アッシュ統一戦線の見通し、国内の抗日民族統一戦線の発展の必然性を具体的につかんでいた。日本にたいするソヴェト政権の宣戦布告は、一九三四年四月、まだ華南の山中で死斗をつづけている最中であつたし、全國民にたいする抗日救国の訴えも、人跡未到の砂漠から発せられたものである。史上空前の長征は「北上抗日」というスローガンをかかげていた。陣地戦をさけた遊撃戦と機動戦の併用という八路軍の戦術は、戦略的な持久戦の構想からみちびきだされたものであり、その構想は、日本帝国主義と中國民族との矛盾の

前にはすべての国内の矛盾が第二義的にならざるをえないという判断にもとづく民族統一戦線の確信、民衆の自覚にたいする深い信頼に基礎をおいていた。かれらの抗日戦論は、たんなる戦争論ではなく、生産と建設の計画書であり、戦争を根絶するための哲学でさえあった。

日本軍がとつた奪いつくし、焼きつくし、殺しつくすという三光（光とは、……しつくすの意味）戦術にたいして、かれらがこれに対抗してとつた戦術はこのようなものであった。

「日本兵士は日本の勤労大衆の子弟である。かれらは日本の軍閥と財閥に欺かれ、強制されて戦うことを強いられている。したがって、

- (1) 日本人捕虜に対し、いかなる種類の加害ないし侮辱も嚴重に禁止する。かれらの個人所有物を没収したり毀損したりすることは許されない。わが軍の指揮官や各級戦士員で、この命令に背くものは処罰される。
- (2) すべての傷兵と日本人捕虜にたいして、特別の保護と適切な医療処置をあたえなければならない。
- (3) 本国または原隊に帰ることを望む日本人捕虜にたいして、できるだけ便宜をあたえなければならない。
- (4) 中国にとどまり、あるいは中国軍のために働くことを望む日本人捕虜には、適当な仕事をあたえ、勉学することを望むものには、適当な学校への入学を斡旋してやる。
- (5) 家族または友人との通信を望むものには便宜をあたえる。
- (6) 戦死した日本兵は埋葬し、適当な石または木の墓標を設けるものとする。

これは朱徳と彭徳懐が署名した八路軍全体にたいする命令書であったが、同時に日本軍全体にむけた倫理的挑発状でもあった。日本にとっては「日支事変」であったが、かれら六億の民衆にとっては、まさしく「抗日民族

解放戦争」だったのである。

徹底的な全面抗戦という立場につらぬかれた日本分析も、啓蒙的な小冊子から王芸生の『六十年来の中国と日本』にいたるまで、数十種以上発行されているようであり、それらの多くは日本帝国主義の侵略政策の本質を説きあかすことを主眼としている。抗戦一周年を記念して、日本の真正新秩序論を全面的に批判した蔣介石の演説なども、全国の中等学校の教科書として採用されている。しかし、延安と八路軍のこのような日本軍にたいする態度は、分析や批判という次元では説明しがたいものであり、武士道讃美やその翼返しにすぎぬ周仏海のような批判とは、まるで根本からちがうようである。死と亡国というぬきさしならぬ事態の中で、日本人にたいする憎しみと愛情を一人一人の戦闘行為の中にまで倫理化したといえるのではないか。それは、われわれ日本人にとって、参戦したソ連軍の低級さを思いあわせるとき、いわゆる「プロレタリア国際主義」という一言で片付けられない重みを感じさせるほどのものだった。

ある時朱徳が外人記者に、日本人の大尉が捕虜になってからの横柄な態度を話した。「ある時、林彪（八路軍の司令官）がその捕虜の家へ入っていくと、かれは坐ったままで、鶏や卵や米をもってこいと命じた。林は冷やかに落つた声で答えた。われわれが君を親切に扱うのを誤解してはいけない。われわれが君の目下のものという意味では断じてない。君は君を見にきた農民をなぐつたというではないか。このため君を殺そうとは思わないが、二度と中国人をなぐつたら、公衆の面前で鞭打つことにする。」

こう話しながら、朱徳はいった。「今まであの男は徒勞だった。今日はかれに私の馬をやつた。とまどつたようだが受取つた。あの男もわかつてくるだろう。」

われわれは、いつどこで、だれにたいして、敗戦したのだろうか。

五

明治以後の日本の歩みがそうであったように、十五年の戦争で中国人は日本と日本人をよけて通ることはできなかった。日本という国、さまざまな日本人を、かれらは否応なしに自分の内側でとらえざるをえなかった。抗日戦の過程で生れた文学や社会科学の作品も、こういう角度からみれば、ほとんど大部分が日本との対決と苦闘の表現だったといえるのではなからうか。東亜文芸復興という合言葉のもとに、日本の町人文学や武者小路の文学を愛していた岡作人が汪兆銘の政權に運命を託したのも、やはりある意味での対決であった。郭沫若に劣らぬほど日本を知り、日本人を愛した夏衍なども、「アッシュ細菌」で一人の青年科学者の苦悩と転身をえがきながら、それをある日本の女性の運命と結びつけ、また、日本のマルクス主義の影響をうけていた歴史家呂振羽も抗戦期の課題を、歴史を書くことではなく、新しい歴史像と方法の探求においた。それは当然認識方法における過去の自己とのきびしい対決をせまるものであった。呂振羽は、アジア生産様式論の歪曲に抗して、中国を世界史の一般法則の中に正当に位置づけるために、まず日本の進歩的歴史学の「東洋社会の停滞性」という問題意識のしかたを拒否しなければならなかった。

改革派から革命派へ、孫文から毛沢東へと移りかわってきた中国の日本観の歴史的過程は、それぞれの歴史的段階のちがいにともづく断絶の面をもっている。平和的共存と技術革新をめざす現代の日本観も、したがって、抗日戦の時代とはまったくことなり、アメリカの従属関係から脱けだして、自立的発展の道をとり、アジアの復

興と建設に寄与しよう方向をとるかぎり、独占資本の大陸進出をも拒んではない。

しかし、中国の日本観の断絶は、一つの過程での断絶の側面であつて、歴史の断絶ではない。一つの過程のもう一つの側面——継承を否定するものではない。かれらにおいては、継承は断絶をつうじての継承であり、断絶は継承を基礎とする断絶である。継承と断絶の契機は、すべてを賭けた実践の中で統一されている。

日本人の中国観は、明治の末いらい、継承と断絶の契機が互いにふれあい、かみあつて、一つに統一されることなく、七十年の累積をそのままに残しているのではないか。この問題はべつの場所において論ずべきであろうが、中国の日本観がこのような美質的重みをもっているに反して、日本ではまたそれと四つに組みうる主体的努力が結実していない。今日の混迷の原因を求めれば、いやでもここにつきあたざるをえないのだ。したがって、「日本軍国主義と日本人民」はまだ真の意味での断絶をもちえないこと、これを確認するところからしか、われわれは出発できないのではなからうか。

たしかに、これは一つの負いめである。これを否定しなくても、歴史の事実の中に生きつづけるし、この認識に應じ、あるいは怠つて、受けうりの政府攻撃に救いを求めても、負いめの悪循環をたちきることはできない。同様に、この負いめを消極的に認め、重苦しい気分がゆがみを析出することに問題を限定する方法からも、現実を具体的に導びく力は生れないだろう。

負いめを、われわれの主体において積極的に認めるということは、明治いらいの日本民族が歩んだ進取と積極性の伝統をつぐということだろう。民族のエネルギーと活力を掘りおこし、民族の発展を実際におしすすめることをつうじてでなければ、民族の再生を實現し、無から有をうみだし、負を正に転化することはできないのだ。

国家独立の基礎になる国民経済を、どのようにして自立化するか。

国民経済の根幹となる科学技術を、外国の依存からぬけて、世界の水準に追いつき、追いこすには、どうしたらよいか。

経済構造の大変動をつつずる経済の発展と教育の飛躍的発展を、だれがどのように推進すべきか。

資本家は、勤労者の力を汲みあげなければならないし、勤労者もまた、反対闘争至上主義から脱却しなければならないだろう。国民の巨大な潜在エネルギーを、民族の発展のために活用できるかどうか、ここに真の意味での保守と進歩の分れめがある。中国が自民党にも友人を求めるのは、日本の自立的発展の途上にこそ、対等な交流と結合の必然性があるという確信にもとづくものだ。にもかかわらず、やはりアメリカの命をうけなければ、中国と対等につきあえないというのでは、半永久的に世界の孤児とならざるをえない。

もちろん、なりゆきにまかせて日本民族が離散し、民族としての滅亡を甘んずることになるならば、このような煩わしいことを考える必要はない。そうであっても、東洋のインカ帝国として、日本は観光地としての価値をいちたんと高められるかもしれない。

(玉嶋信義)

あとがき

日中関係の現在の混迷は、日本の対中国政策のいきなりを示しているが、この根はじつに奥深いものだ。つきつめれば、われわれ一人一人の理解のたりなさ、考えの甘さ、收拾つかぬ未整理の状態を反映しているといってもよほどである。もはや、現実の困難さと重大性に眼をつむって、怠惰であったり臆病であったりすることは許されないのではないか。

自分の立っている足元を、しっかり見直すためにも、このさい、いろいろな先入観をいちど棚上げして、相手のいうことに心を空しくして、耳を傾けてみたい。建設の様子はある程度知ることができても、これまで中国人がいったいわれわれに何を語りかけ、日本人をどう見ているのか、隣人たるわれわれの常識としてもっているべき知識はあまりにも足りなかったようだ。明治以後の両国の交渉は、およそ世界史に類をみないほど惨害に満ちたものであったが、不幸の内容がいまだに傷手となって残っているほど、この交りは深刻であり、これを離れてわれわれの明日の生活も思想も論じられないほどである。

日本の側でも、明治以後の中国にかんする記録や文献は数限りないが、中国においても同様だ。ここに集めたものは、ほんの一部分にすぎない。どれを取り、どれを捨てるか、その選択に自ら運命の主観や好みも反映せざるをえないけれど、私としては、できるだけ虚心に、現在の課題に照明をあてることを第一義として心がけた。その結果、当初予定していた岡作人や藤方震らの浪漫的な日本論を割愛せざるをえなくなり、いささか四角ばつ